

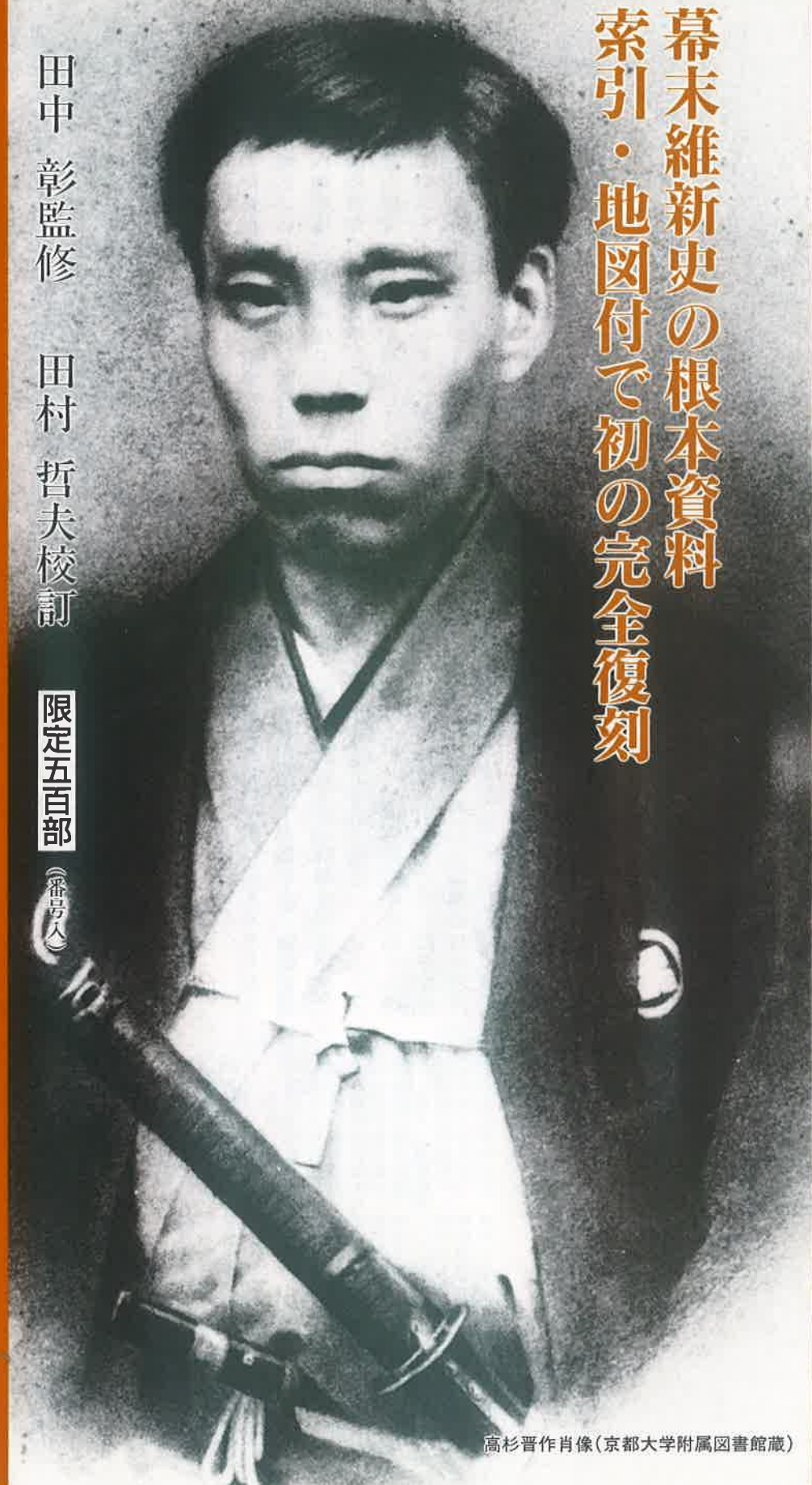
幕末維新史の根本資料
索引・地図付で初の完全復刻

田中 彰監修

田村 哲夫校訂

限定五百部

(番号入)



高杉晋作肖像(京都大学附属図書館蔵)

定 本

奇兵隊日記

全五卷

マツノ書店

内容見本・上巻

奇兵隊日記

奇兵隊。対惣奉行之正兵。而名焉。蓋非專事奇。奇兵中。亦有正。有奇也。

六月六日

六月六日。東行奉君命。^(高杉)戌刻馬関着。御本陣白石正一郎方ニ投宿仕候処、土屋蕭海・入江

六月七日

子遠寄宿仕居候ニ付、談合及数更候事

六月八日

同七日朝、東行与子遠訪来島翁、久留米人ヲ頼ミ肥前佐賀ニテ八十ポンド以上ノ大炮ヲ買

六月九日

求ムルノ策ヲ決シ候事、此日奇兵隊入十五人アリ、申刻長府ヨリ注進アリ、黒井沖ニ夷

六月十日

艦相見え候由ニ付、各支度相調候処、以後夷艦之様子不相知相成候事、右佐賀行松島剛

六月十一日

藏ニ相決候ヘトモ、注進一条ニ付隙取、戌刻剛藏米人同道ニテ内裏渡海仕候事

六月十二日

同八日、今日奇兵隊ノ人々益相加候事

六月十三日

御用船壹艘借受、東行以下曳島^(高杉)之外台場一見仕候事、午刻佐々木亀之進來談、山内賢之

六月十四日

進・飯田行藏軍功を話す、今日瀧弥太郎・赤祢幹之允自山口帰着、奇兵隊軍氣益張候事

六月十五日

薩摩重野厚之丞・川路正之進探索之為白石宅ニ来ル、東行相對頗有益之論有之、兩人共

六月十六日

有志士ト見定候事

六月十七日

同九日朝辰牌、久留米藩淵上郁太郎・山田辰三郎・佐田素一郎白石宅へ過訪、高杉・瀧・

六月十八日

赤祢相對、今般有馬監物義改心奮発上京致し候、就ては一応山口へ罷出、御両殿様へ拜

六月十九日

謁願度、御政府衆へも御相對仕、万事御高論承り度、其御周旋ノ為、有志ノ御方御一人

六月二十日

御苦勞被下度との義ニ付、入江九一同道罷越候事

六月二十一日

今朝宮口清吉萩表へ罷越え、尤弓隊人数精選鼓舞すへき一策之事

① 文久日記1 (文久3・6)

司令官三好六郎・二階登人一手、同堀潜太郎・野村三千蔵一手、忽砲一門、司令官岩本勘九郎一手、参謀時山直八・書記元森熊次郎・陣場見合桂権吾・正名団一小隊・報国隊一手等渡海賊之残兵尚山間より時々発砲せり、我亦数人を分ち狙撃せしむ、賊遂に引退き、止り守る者一人も無之、賊等渡海用意之為、海浜に繋置候大小船千余艘悉く焼払ひ、兵を分ち門司口へ進む、一手は海浜より進み、早鞆山に登り、同所二砲台を奪取、其一手は溪谷之間に出、小笠原近江守陣所へ押寄、不残焼払ひ共二門司関ニ相会ス、田の浦を守る者報国隊之一手耳、於于此を定置処之相図を以中軍へ報知シ、中軍之一手悉く馬関を発ス、乃ち我小隊司令官阿川四郎・堀滝太郎一手、書記兼小隊司令官杉山莊一郎・渡辺義助一手、惣管山内梅三郎・軍監福田俠平・参謀片野十郎・書記湯浅祥乃助・斥候滝原勉・内藤源吾・本陣詰一手、器械方南野一郎・小隊司令官鳥尾小弥太一手、仏蘭西式一門司令士山本平八郎一手、同白尾行八郎・正名団二小队共に門司関に至ル、賊兵既に遁去、惣軍陣を敷、兵糧を認め暫く間休息、ハツ時海軍より使節を遣し、將に馬関へ引去之利あらん事を謀ル、衆議不定決或は云ク、此勢に乗シ大里を襲は何之難き事有之、速に襲にしからず、不燃は好機を失ひ悔るも及ふ無らんと、或ハ云ク、今日之役実に意外之大勝利、固より其威を九国中に示す足れり、然るを疲労之兵士を以有備之大里を襲ひ掛、若し誤て敗北に至らは前之大勝も悉く水泡と相成耳ならず、爾後如何之大難に可立至も難測、元来九国之地永く守るべき之地形に非ず、暫く引退キ時を見て進は、大里あらん、議遂に定る、依て其事を以海軍へ報し、七ツ時過キ門司人家へ放火し、先陣よ

「原本」の構成および「定本」との対照

第一巻	第一 叢書一 戊午(安政五)年諸記 (安政五)元治一 関係諸記録を編綴	41
第二巻	第二 奇兵隊日記	1
第三巻	第三 無表題 文久三・六・六(元治一・四・二〇)もと八冊を合綴	2
第四巻	第四 (日記 表紙欠け) 元治一・八・二〇(慶応一・五・二九)もと八冊を合綴	3
第五巻	第五 無表題 文久三・六・六(元治一・四・二〇)もと八冊を合綴	4
第六巻	第六 田ノ浦日記・壇ノ浦日記(もと三冊を合綴)	5
第七巻	第七 叢書 元治一・二・二(慶応一・二・二)	6
第八巻	第八 日記 慶応一・閏五・一(二・二) 吉田在陣	7
第九巻	第九 叢書 第三冊 乙丑後月 慶応二年閏五月 改之 (内容は、元治元・三(慶応一・二)の關係情報など)	8
第十巻	第十 日記 慶応二・一・一(四・二九) 吉田在陣	9
第十一巻	第十一 開取書 寅(慶応二)六月 長府在陣	10
第十二巻	第十二 日記 寅(慶応二)五月 慶応二・五・一(八・晦)もと四冊を合綴	11
第十三巻	第十三 豊前地戦争一件日記 丙寅(慶応二)六月一ノ宮出張より	12
第十四巻	第十四 無表題(日記) 丁卯(慶応三)三月吉田へ引揚マデ	13
第十五巻	第十五 丁卯(慶応三)日記 慶応三・一・一(三・二八) 足立在陣	14
第十六巻	第十六 華浦出張日記 慶応三・八・三(二・二七) 吉田在陣	15
第十七巻	第十七 上国報知控 慶応四辰ノ正月 津田姓	16
第十八巻	第十八 戊辰日記 明治一・三・七(四・二三) 越後口	17
第十九巻	第十九 無表題(日記) 慶応四・四・二(五・九・二七) (もと五冊を合綴)	18
第二十巻	第二十 出軍日記 与坂出張会議所 明治一・五・一(八・一) 吉田在陣	19
第二十一巻	第二十一 日載 明治一・七・二(八・二四) 吉田在陣	20
第二十二巻	第二十二 日載 明治一・九・七(九・二七) 吉田在陣	21
第二十三巻	第二十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	22
第二十四巻	第二十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	23
第二十五巻	第二十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	24
第二十六巻	第二十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	25
第二十七巻	第二十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	26
第二十八巻	第二十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	27
第二十九巻	第二十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	28
第三十巻	第三十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	29
第三十一巻	第三十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	30
第三十二巻	第三十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	31
第三十三巻	第三十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	32
第三十四巻	第三十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	33
第三十五巻	第三十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	34
第三十六巻	第三十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	35
第三十七巻	第三十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	36
第三十八巻	第三十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	37
第三十九巻	第三十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	38
第四十巻	第四十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	39
第四十一巻	第四十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	40
第四十二巻	第四十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	41
第四十三巻	第四十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	42
第四十四巻	第四十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	43
第四十五巻	第四十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	44
第四十六巻	第四十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	45
第四十七巻	第四十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	46
第四十八巻	第四十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	47
第四十九巻	第四十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	48
第五十巻	第五十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	49
第五十一巻	第五十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	50
第五十二巻	第五十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	51
第五十三巻	第五十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	52
第五十四巻	第五十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	53
第五十五巻	第五十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	54
第五十六巻	第五十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	55
第五十七巻	第五十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	56
第五十八巻	第五十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	57
第五十九巻	第五十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	58
第六十巻	第六十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	59
第六十一巻	第六十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	60
第六十二巻	第六十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	61
第六十三巻	第六十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	62
第六十四巻	第六十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	63
第六十五巻	第六十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	64
第六十六巻	第六十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	65
第六十七巻	第六十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	66
第六十八巻	第六十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	67
第六十九巻	第六十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	68
第七十巻	第七十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	69
第七十一巻	第七十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	70
第七十二巻	第七十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	71
第七十三巻	第七十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	72
第七十四巻	第七十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	73
第七十五巻	第七十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	74
第七十六巻	第七十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	75
第七十七巻	第七十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	76
第七十八巻	第七十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	77
第七十九巻	第七十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	78
第八十巻	第八十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	79
第八十一巻	第八十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	80
第八十二巻	第八十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	81
第八十三巻	第八十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	82
第八十四巻	第八十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	83
第八十五巻	第八十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	84
第八十六巻	第八十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	85
第八十七巻	第八十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	86
第八十八巻	第八十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	87
第八十九巻	第八十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	88
第九十巻	第九十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	89
第九十一巻	第九十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	90
第九十二巻	第九十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	91
第九十三巻	第九十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	92
第九十四巻	第九十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	93
第九十五巻	第九十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	94
第九十六巻	第九十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	95
第九十七巻	第九十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	96
第九十八巻	第九十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	97
第九十九巻	第九十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	98
第一百巻	第一百 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	99
第一百零一巻	第一百零一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	100
第一百零二巻	第一百零二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	101
第一百零三巻	第一百零三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	102
第一百零四巻	第一百零四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	103
第一百零五巻	第一百零五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	104
第一百零六巻	第一百零六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	105
第一百零七巻	第一百零七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	106
第一百零八巻	第一百零八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	107
第一百零九巻	第一百零九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	108
第一百一十巻	第一百一十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	109
第一百一十一巻	第一百一十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	110
第一百一十二巻	第一百一十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	111
第一百一十三巻	第一百一十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	112
第一百一十四巻	第一百一十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	113
第一百一十五巻	第一百一十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	114
第一百一十六巻	第一百一十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	115
第一百一十七巻	第一百一十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	116
第一百一十八巻	第一百一十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	117
第一百一十九巻	第一百一十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	118
第一百二十巻	第一百二十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	119
第一百二十一巻	第一百二十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	120
第一百二十二巻	第一百二十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	121
第一百二十三巻	第一百二十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	122
第一百二十四巻	第一百二十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	123
第一百二十五巻	第一百二十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	124
第一百二十六巻	第一百二十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	125
第一百二十七巻	第一百二十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	126
第一百二十八巻	第一百二十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	127
第一百二十九巻	第一百二十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	128
第一百三十巻	第一百三十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	129
第一百三十一巻	第一百三十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	130
第一百三十二巻	第一百三十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	131
第一百三十三巻	第一百三十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	132
第一百三十四巻	第一百三十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	133
第一百三十五巻	第一百三十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	134
第一百三十六巻	第一百三十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	135
第一百三十七巻	第一百三十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	136
第一百三十八巻	第一百三十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	137
第一百三十九巻	第一百三十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	138
第一百四十巻	第一百四十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	139
第一百四十一巻	第一百四十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	140
第一百四十二巻	第一百四十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	141
第一百四十三巻	第一百四十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	142
第一百四十四巻	第一百四十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	143
第一百四十五巻	第一百四十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	144
第一百四十六巻	第一百四十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	145
第一百四十七巻	第一百四十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	146
第一百四十八巻	第一百四十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	147
第一百四十九巻	第一百四十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	148
第一百五十巻	第一百五十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	149
第一百五十一巻	第一百五十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	150
第一百五十二巻	第一百五十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	151
第一百五十三巻	第一百五十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	152
第一百五十四巻	第一百五十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	153
第一百五十五巻	第一百五十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	154
第一百五十六巻	第一百五十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	155
第一百五十七巻	第一百五十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	156
第一百五十八巻	第一百五十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	157
第一百五十九巻	第一百五十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	158
第一百六十巻	第一百六十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	159
第一百六十一巻	第一百六十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	160
第一百六十二巻	第一百六十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	161
第一百六十三巻	第一百六十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	162
第一百六十四巻	第一百六十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	163
第一百六十五巻	第一百六十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	164
第一百六十六巻	第一百六十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	165
第一百六十七巻	第一百六十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	166
第一百六十八巻	第一百六十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	167
第一百六十九巻	第一百六十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	168
第一百七十巻	第一百七十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	169
第一百七十一巻	第一百七十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	170
第一百七十二巻	第一百七十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	171
第一百七十三巻	第一百七十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	172
第一百七十四巻	第一百七十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	173
第一百七十五巻	第一百七十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	174
第一百七十六巻	第一百七十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	175
第一百七十七巻	第一百七十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	176
第一百七十八巻	第一百七十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	177
第一百七十九巻	第一百七十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	178
第一百八十巻	第一百八十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	179
第一百八十一巻	第一百八十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	180
第一百八十二巻	第一百八十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	181
第一百八十三巻	第一百八十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	182
第一百八十四巻	第一百八十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	183
第一百八十五巻	第一百八十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	184
第一百八十六巻	第一百八十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	185
第一百八十七巻	第一百八十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	186
第一百八十八巻	第一百八十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	187
第一百八十九巻	第一百八十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	188
第一百九十巻	第一百九十 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	189
第一百九十一巻	第一百九十一 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	190
第一百九十二巻	第一百九十二 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	191
第一百九十三巻	第一百九十三 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	192
第一百九十四巻	第一百九十四 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	193
第一百九十五巻	第一百九十五 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	194
第一百九十六巻	第一百九十六 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	195
第一百九十七巻	第一百九十七 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	196
第一百九十八巻	第一百九十八 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	197
第一百九十九巻	第一百九十九 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	198
第二百巻	第二百 日載 明治一・二・五(二・一四) 奇兵隊(北越戦争死傷者名簿)	199

★下の□数字は「定本」の目次番号です。



決定版の刊行をよろこぶ

東京大学史料編纂所教授

宮地 正人

私は仕事柄、幕末維新期に作成された全国各地の探索書・風説留に屢々目を通すことがある。武士や農民そして町人の人々が、どのようなことに関心を寄せ、必死に事態の推移と真実を知ろうとしていたかが、最も的確に判明するのがこの種の史料なのである。

私にとって特に印象深いのは、それらのいずれもが、文久三年五月の下関での奉勅攘夷砲撃、元治元年八月の下関戦争、そして慶応二年の四境の戦いに熱い関心のまなざしを向け、長州藩の敗北してもまた立上る強靱な軍事力の秘密を、武士階級の正規軍ではない、奇兵隊を始めとする諸隊勢力の存在に見いだしている事実である。そして記録者たちは、ひるがえって自国と自藩の軍事編成の問題を凝視する。

奇兵隊の性格については、従来もさまざまな立場で論じられてきた。ただ私が不満に思うのは、当時の諸階級の人々のこのような尋常ならざる関心という実態を踏えての検討が、未だ不十分なのではないのか、ということである。そして明治元年の戊辰戦争期に至るや、「勇士同志」の結合体である奇兵隊以下の諸隊を中核とし、農兵、町兵、郷土隊等から構成される強力な長州藩兵制こそが、諸藩と各地に叢生する草莽諸隊の自己変革すべき具体的なモデルとして立ちあらわれる。

文久三年六月五日、セミラミスとタンクレード二仏戦艦攻撃を直接の契機として形成された奇兵隊がどのようなものに成長するのかは、当事者の高杉も含め見通しがあつた訳では決してあるまい。只一つ明白なことは、従来の藩軍勢力では近代西洋諸国の強大な軍事力には全く太刀打ち出来ないという点であつた。そして明治三年一月の脱隊騒動による長州藩諸隊の解体に至る足かけ八年間の長州藩は、外圧とナショナリズム、民衆と近代軍隊という明治維新史研究の第一級の課題を解くべき絶好の場なのであり、その際の根本史料が『奇兵隊日記』なのである。

今回マツノ書店から、京都大学所蔵の原本に基き、戦前の日本史籍協会本の誤植、脱落等の多くの不備を全面的に改めた決定版が刊行されるという。しかも参加した隊員個々人の動きをおさえる上で不可欠な詳細な人名索引も附されている。奇兵隊を中核とする諸隊研究が山口県レベルではなく、全国レベルで展開されることを切望している者として、今回の刊行をよろこび、一文を草する次第である。



奇兵隊研究のあたらしい動向を期待する

北海道大学文学部教授

井上 勝生

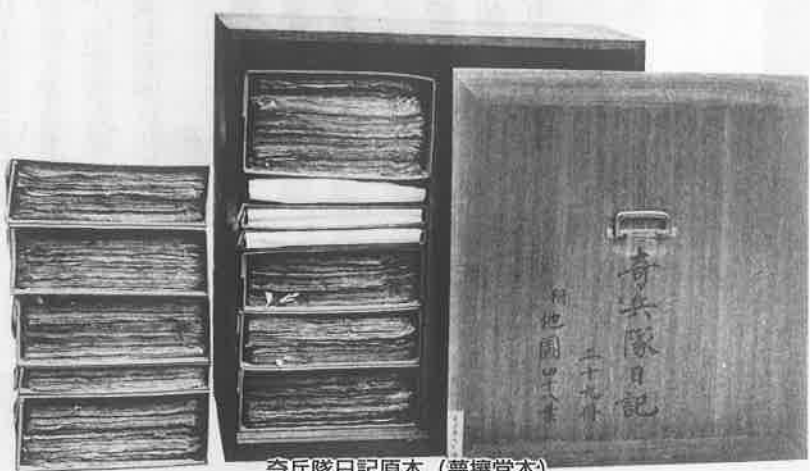
マツノ書店から『奇兵隊日記』が京都大学付属図書館所蔵の原本によって、正確に復刻されると聞きました。明治維新を研究するものとして、マツノ書店の事業にはお世話になってきましたが、今回の復刻事業も、待ち望まれていた仕事で、学会に寄与するところきわめて大きいと、感謝します。

奇兵隊は、マッカーシズムの嵐のなかで悲劇的な死を遂げたE・H・ノーマン（『日本における近代国家の成立』）、そして遠山茂樹、井上清、田中彰、芝原拓自などの錚々たる先学によって、明治維新を推進し、担った軍事・政治勢力を代表的に示すものとして、さまざまに論じられてきました。論争は、同時代の課題と重なって、日本の近代の性格の評価をめぐる歴史学会を揺るがす、実に緊迫した論争になっていました。

奇兵隊が戦った幕長戦争、戊辰戦争、いずれも日本の近代の出発の帰趨を賭けた戦いであることから、庶民も入隊していた奇兵隊は、明治維新史研究の論争の核心のひとつとなって当然です。維新史研究について、西南雄藩に研究が偏りすぎているといった批判がだされ、実際にそれは拝聴すべき批判ですが、西南雄藩の研究の重要性は、それによって、決して減少するものではありません。

近年、奇兵隊の研究が、著しく減少しているのは、わたしは、まったく新しい研究動向が登場する準備の谷間ではないかと、考えています。現在、世界的に、近代（モダン）とは何か、その光と影を精密にとらえようとする研究が渦巻きはじめています。世界における近代の光と影、そして日本における近代の光と影、こうしたものに研究者の厳しい検証の視線が届きはじめてたのです。

『奇兵隊日記』を繙く時、奇兵隊が維新のトレーガーとして果たした活動と同時に、やがて脱隊騒動に帰結する大きな「暗闇」、そして「暗闇」にいたるさまざまな隊士の低層での悲劇的な事件の数々に気がかざるをえません。事件のひとつを「志士と民衆——長州藩諸隊と招魂場」（岩波講座 日本歴史 第16巻 近代1）に記しました。そこでも、奇兵隊日記の原本を使って論証しましたが、事実の厳密な検証には、正確なテキストが不可欠です。若い研究者たちが、マツノ書店刊行の正確なテキストから、奇兵隊のさまざまな光と影を鋭敏に追求し、やがて日本「近代」の光と影を大きく再構成してくれることを期待してやみません。



奇兵隊日記原本（夢攘堂本）

『定本奇兵隊日記』目次

上巻

第一部 奇兵隊日記

- 第1 馬関攘夷戦争
1 文久日記一 文久三・六・六十六
2 文久日記二 文久三・六・六十七
3 文久日記三 文久三・七・一五八
4 文久日記四 文久三・七・一五九
5 文久日記五 文久三・八・一五九
6 文久日記六 文久三・八・一六〇
7 文久日記七 文久三・八・一六〇
8 文久日記八 文久三・八・一六〇
9 文久日記九 文久三・八・一六〇
10 文久日記十 文久三・八・一六〇
11 文久日記十一 文久三・八・一六〇
12 文久日記十二 文久三・八・一六〇
13 文久日記十三 文久三・八・一六〇
14 文久日記十四 文久三・八・一六〇
15 文久日記十五 文久三・八・一六〇
16 文久日記十六 文久三・八・一六〇
17 文久日記十七 文久三・八・一六〇
18 文久日記十八 文久三・八・一六〇
19 文久日記十九 文久三・八・一六〇
20 文久日記二十 文久三・八・一六〇
21 文久日記二十一 文久三・八・一六〇
22 文久日記二十二 文久三・八・一六〇
23 文久日記二十三 文久三・八・一六〇
24 文久日記二十四 文久三・八・一六〇
25 文久日記二十五 文久三・八・一六〇
26 文久日記二十六 文久三・八・一六〇
27 文久日記二十七 文久三・八・一六〇
28 文久日記二十八 文久三・八・一六〇
29 文久日記二十九 文久三・八・一六〇
30 文久日記三十 文久三・八・一六〇
31 文久日記三十一 文久三・八・一六〇
32 文久日記三十二 文久三・八・一六〇
33 文久日記三十三 文久三・八・一六〇
34 文久日記三十四 文久三・八・一六〇
35 文久日記三十五 文久三・八・一六〇
36 文久日記三十六 文久三・八・一六〇
37 文久日記三十七 文久三・八・一六〇
38 文久日記三十八 文久三・八・一六〇
39 文久日記三十九 文久三・八・一六〇
40 文久日記四十 文久三・八・一六〇
41 文久日記四十一 文久三・八・一六〇
42 文久日記四十二 文久三・八・一六〇
43 文久日記四十三 文久三・八・一六〇
44 文久日記四十四 文久三・八・一六〇
45 文久日記四十五 文久三・八・一六〇

中巻

第二部 幕長戦争

- 第3 幕長戦争
1 慶応二年日記一 慶応二・一・一四二
2 慶応二年日記二 慶応二・一・一四三
3 慶応二年日記三 慶応二・一・一四四
4 慶応二年日記四 慶応二・一・一四五
5 慶応二年日記五 慶応二・一・一四六
6 慶応二年日記六 慶応二・一・一四七
7 慶応二年日記七 慶応二・一・一四八
8 慶応二年日記八 慶応二・一・一四九
9 慶応二年日記九 慶応二・一・一五〇
10 慶応二年日記十 慶応二・一・一五一
11 慶応二年日記十一 慶応二・一・一五二
12 慶応二年日記十二 慶応二・一・一五三
13 慶応二年日記十三 慶応二・一・一五四
14 慶応二年日記十四 慶応二・一・一五五
15 慶応二年日記十五 慶応二・一・一五六
16 慶応二年日記十六 慶応二・一・一五七
17 慶応二年日記十七 慶応二・一・一五八
18 慶応二年日記十八 慶応二・一・一五九
19 慶応二年日記十九 慶応二・一・一六〇
20 慶応二年日記二十 慶応二・一・一六一
21 慶応二年日記二十一 慶応二・一・一六二
22 慶応二年日記二十二 慶応二・一・一六三
23 慶応二年日記二十三 慶応二・一・一六四
24 慶応二年日記二十四 慶応二・一・一六五
25 慶応二年日記二十五 慶応二・一・一六六
26 慶応二年日記二十六 慶応二・一・一六七
27 慶応二年日記二十七 慶応二・一・一六八
28 慶応二年日記二十八 慶応二・一・一六九
29 慶応二年日記二十九 慶応二・一・一七〇
30 慶応二年日記三十 慶応二・一・一七一
31 慶応二年日記三十一 慶応二・一・一七二
32 慶応二年日記三十二 慶応二・一・一七三
33 慶応二年日記三十三 慶応二・一・一七四
34 慶応二年日記三十四 慶応二・一・一七五
35 慶応二年日記三十五 慶応二・一・一七六
36 慶応二年日記三十六 慶応二・一・一七七
37 慶応二年日記三十七 慶応二・一・一七八
38 慶応二年日記三十八 慶応二・一・一七九
39 慶応二年日記三十九 慶応二・一・一八〇
40 慶応二年日記四十 慶応二・一・一八一
41 慶応二年日記四十一 慶応二・一・一八二
42 慶応二年日記四十二 慶応二・一・一八三
43 慶応二年日記四十三 慶応二・一・一八四
44 慶応二年日記四十四 慶応二・一・一八五
45 慶応二年日記四十五 慶応二・一・一八六

下巻

第三部 戊辰戦争

- 第4 戊辰戦争
1 明治元年日記一 明治元・一・一四二
2 明治元年日記二 明治元・一・一四三
3 明治元年日記三 明治元・一・一四四
4 明治元年日記四 明治元・一・一四五
5 明治元年日記五 明治元・一・一四六
6 明治元年日記六 明治元・一・一四七
7 明治元年日記七 明治元・一・一四八
8 明治元年日記八 明治元・一・一四九
9 明治元年日記九 明治元・一・一五〇
10 明治元年日記十 明治元・一・一五一
11 明治元年日記十一 明治元・一・一五二
12 明治元年日記十二 明治元・一・一五三
13 明治元年日記十三 明治元・一・一五四
14 明治元年日記十四 明治元・一・一五五
15 明治元年日記十五 明治元・一・一五六
16 明治元年日記十六 明治元・一・一五七
17 明治元年日記十七 明治元・一・一五八
18 明治元年日記十八 明治元・一・一五九
19 明治元年日記十九 明治元・一・一六〇
20 明治元年日記二十 明治元・一・一六一
21 明治元年日記二十一 明治元・一・一六二
22 明治元年日記二十二 明治元・一・一六三
23 明治元年日記二十三 明治元・一・一六四
24 明治元年日記二十四 明治元・一・一六五
25 明治元年日記二十五 明治元・一・一六六
26 明治元年日記二十六 明治元・一・一六七
27 明治元年日記二十七 明治元・一・一六八
28 明治元年日記二十八 明治元・一・一六九
29 明治元年日記二十九 明治元・一・一七〇
30 明治元年日記三十 明治元・一・一七一
31 明治元年日記三十一 明治元・一・一七二
32 明治元年日記三十二 明治元・一・一七三
33 明治元年日記三十三 明治元・一・一七四
34 明治元年日記三十四 明治元・一・一七五
35 明治元年日記三十五 明治元・一・一七六
36 明治元年日記三十六 明治元・一・一七七
37 明治元年日記三十七 明治元・一・一七八
38 明治元年日記三十八 明治元・一・一七九
39 明治元年日記三十九 明治元・一・一八〇
40 明治元年日記四十 明治元・一・一八一
41 明治元年日記四十一 明治元・一・一八二
42 明治元年日記四十二 明治元・一・一八三
43 明治元年日記四十三 明治元・一・一八四
44 明治元年日記四十四 明治元・一・一八五
45 明治元年日記四十五 明治元・一・一八六

下巻

第四部 奇兵隊日記付属記録

- 第1 創設日記・諸記録
1 奇兵隊創設日記（写本） 文久三・六・一十一
2 奇兵隊諸記録 文久三・六・一十一
3 安政五・元治元
4 文久三・一・一六二
5 文久三・一・一六三
6 文久三・一・一六四
7 文久三・一・一六五
8 文久三・一・一六六
9 文久三・一・一六七
10 文久三・一・一六八
11 文久三・一・一六九
12 文久三・一・一七〇
13 文久三・一・一七一
14 文久三・一・一七二
15 文久三・一・一七三
16 文久三・一・一七四
17 文久三・一・一七五
18 文久三・一・一七六
19 文久三・一・一七七
20 文久三・一・一七八
21 文久三・一・一七九
22 文久三・一・一八〇
23 文久三・一・一八一
24 文久三・一・一八二
25 文久三・一・一八三
26 文久三・一・一八四
27 文久三・一・一八五
28 文久三・一・一八六
29 文久三・一・一八七
30 文久三・一・一八八
31 文久三・一・一八九
32 文久三・一・一九〇
33 文久三・一・一九一
34 文久三・一・一九二
35 文久三・一・一九三
36 文久三・一・一九四
37 文久三・一・一九五
38 文久三・一・一九六
39 文久三・一・一九七
40 文久三・一・一九八
41 文久三・一・一九九
42 文久三・一・二〇〇
43 文久三・一・二〇一
44 文久三・一・二〇二
45 文久三・一・二〇三



明治維新史の本質理解に不可欠なカギ 完全復刻『定本奇兵隊日記』成る

大阪大学名誉教授 梅溪 昇

このたび、十年余の歳月をかけた、原本からの完全復刻の『定本奇兵隊日記』が、その付属史料・絵図四十九枚、毛利家文庫所蔵の関連史料、詳細な解説および人名索引など、研究上の新資料とともに、徳山市のマツノ書店から刊行されることになった。

奇兵隊は一八六三年（文久三）高杉晋作が藩に出願し、門閥に関係なく農商をも編入して実力主義のもとに創設した長州藩の非正規軍隊である。以後諸隊が続出したが、奇兵隊は下関砲撃事件・長州征伐などに藩の保守派を退けて奮戦、戊辰戦争にも従軍、終始尊攘討幕運動の先頭に立った長州藩軍主力のなめであった。奇兵隊の活躍は、早く『防長回天史』に述べられ、いろいろ多くの記述があるが、その見解もさまざまで未だ本格的な同隊に関する研究はないといつてもよい。

戦後間もなく高揚した明治維新史研究が、単に維新に至る歴史的経過を辿るに止らず、進んで歴史を押し進めた原動力を究明し、維新変革の性格を論ずるようになって、奇兵隊の問題がクローズアップされたのである。すなわち、E・H・ノーマン氏は『日本における兵士と農民』、遠山茂樹氏は『明治維新』、井上清氏は『日本現代史第一巻明治維新』、奈良本辰也氏は『増補改訂近世封建社会史論』において、それぞれ奇兵隊についての歴史的評価を与えられ、これらの見解は必ずしも同一ではないが、おおむね奇兵隊のもつ反封建的性格ないし民衆のエネルギーが強調された。当時、筆者も『明治維新史における奇兵隊の問題』を発表して、奇兵隊の民衆的要素を検討し、その反封建的エネルギーの過大評価を批判した。これに関しては直ちに小西四郎氏その他から「過少評価」も警戒すべしと批判を受けた。

右の拙論を書いたのは、一九五三年（昭和二八）のこと、すでに四十数年も以前のことになるが、当時使用の史籍協会本『奇兵隊日記』から人名その他をいっいちカードにとり、入隊時の身分を調べ、不十分なながらも身分別隊員構成表をつくったのも今では懐かしい思い出である。ともあれ、さきの諸先輩の研究が示すごとく、奇兵隊の研究・評価は、明治維新史全体の解釈につながる問題である。その前進のためには、根本史料である『奇兵隊日記』の正確・完全なものについて徹底的な検討が行なわれなければならない。

従来われわれの使用してきた史籍協会本は、写本の一つ「史談会本」からの復刻といわれ、原本である「尊攘堂本」と対比すると、相当長文の欠落が随所にあり、人名・地名の誤読も多く、十分な校訂がなされていないとされていた。しかし、このたびマツノ書店の英断により原本からの完全復刻の企画が実現したことはまことに喜ばしい限りである。

この復刻は、元山口県文書館専門研究員の田村哲夫氏、および愛子夫人の長期にわたる献身的な努力と明治維新史研究の第一人者・田中彰教授の監修のもとに、同氏と青山忠正・青山英幸・三宅紹宣三氏の解説、奇兵隊人名索引、補完史料から成る別冊奇兵隊日記絵図を併せて刊行されるもので、大方の読書人および学界にひろく推奨するものである。

■奇兵隊は、文久三年六月、高杉晋作によって創設された。以後諸隊の結成も相つぎ、奇兵隊以下諸隊は、幕末維新の展開過程で重要不可欠の役割を果たした。それゆえ、奇兵隊の研究は、同時に幕末維新史の研究と重なり、長い幕末維新研究史の上で、重要なキー・ポイントとなっている。

■その奇兵隊研究の史料として最も重要視されてきたのは、奇兵隊日記である。当直隊士の手によって日々綴られたこの日記の原本は、品川弥二郎の尊攘堂に置いてあったが、現在は京都大学附属図書館に所蔵されている。これを「尊攘堂本」という。その写本は山口県文書館所蔵の「毛利家本」、東京大学史料編纂所蔵の「史談会本」などがある。そして一般的には、活字化された日本史籍協会叢書の『奇兵隊日記』全四冊が流布している。

■しかし、この日本史籍協会本は「史談会本」から復刻したと思われ、「尊攘堂本」と対比すると、相当長文の欠落が随所にあり、人名・地名の誤読も多く、必ずしも十分な校訂がなされているとはいえない。さらにその構成は錯雑した配列のため使用しにくい。これは、本書の史料としての性格から考えて、重大な難点と言わざるを得ない。その欠陥を補うべく、厳密な校訂による「尊攘堂本」からの完全復刻とその再構成を試みようとして企画したので、このたび刊行する『定本奇兵隊日記』である。

■この計画は今から約十年前に立てられた。以来、元山口県文書館専門研究員の田村哲夫先生及び愛子夫人の昼夜を分かたぬ熱心かつ長期にわたる解説・校訂によって徐々に活字化を進めてきた。田中彰先生も形だけの「監修」でなく終始陣頭指揮に当たられ、本文の校閲にも多くの貴重な時間をとって下さった。その結果、本文中の挿画や別冊の絵図も含めて、奇兵隊日記を最も原型に近い形で、初めて完全復刻することができたと自負している。

■本書の編集方針は左記の通りである。

①本書は「尊攘堂本」奇兵隊日記全二十九冊を底本とし「毛利家本」と校合・補訂の上、復刻したものである。②「尊攘堂本」は、必ずしも合理性のある合綴および配列とは思われない。したがって本書では、この合綴、配列を解き、編年を基本として、日記作成時の原型に近い形に配列し、時期ごとに分類した。

■今回の復刻に際し、次の新資料を加えた。

①五千三百名に及ぶ人名索引。②「尊攘堂本」に付されている絵図四十九枚。③毛利家文庫所蔵、関連史料の一部復刻。④田中彰先生ほかの九十頁に及ぶ詳細な解説。

■本書の刊行が、幕末維新史研究に新たな進展を促すであろうことを願ってやまない。

- 46 諸隊嘆願書写一 元治元・八・慶応元・二
47 諸隊嘆願書写二 明治二二
48 争地度敷死傷名録 (慶応二・六・明治元・一)
49 軍忠状写死傷姓名録 明治元年十二月(北越戦争死傷者)
50 諸隊会議所日記(写本) 慶応元・十・八・一二三
51 上国報知控 慶応四・辰ノ正月 津田雄
52 推記 明治三年正月 秋月

別冊

- ①人名索引 田村哲夫
②補完史料 小山良昌
長三洲筆記 奇兵隊 戊辰役日記 越後
奇兵隊 戊辰五月十九日後 越後
陸奥出羽戦争概略 小山良昌
③解説 田中彰
奇兵隊と明治維新 青山忠正
「奇兵隊日記」の伝存と成り立ち 青山英幸
尊攘堂と「奇兵隊日記」の写真について 三宅紹宣
④原本・刊本対照表
付録 奇兵隊日記絵図四十九枚 解説 青山忠正



刊行に際して

▼原本と逐一照合して、初めて実感できたことですが、「なぜこんなに？」と驚くほど誤字、脱字だらけの、史籍協会版『奇兵隊日記』でした。これは、写本を底本としたからだといわれています。今回刊行する定本は、原本(尊攘堂本)からの完全復刻ですが、第二十五、二十六巻(定本39、50章)は原本が紛失しています。それで二種類の写本(京大本と毛利家本)を比較対照したところ、その表記の違いにまたまた驚きました。どの頁にも異同があるのです。より厳密で、しかも地理的にも有利な毛利家本を底本にしましたが、それにしても昔の写本はすいぶん主観的なものですね。▼苦労したのに、わずか五百部では物足りない思いですが、小社の基本方針です。仕方がありません。小社が渾身の力を込めて刊行した史料は、これですべて品切れになっています。入手困難にならないうちに、今すぐお申し込み下さい。(店主敬白)

■体裁

A5判 全五巻
クロス装 上製 箱入
合計 二千四百頁

■定価

八万円(消費税込・千八百円)

■予約特価

七万円(消費税・千込)

■予約締切

平成九年十二月末日

■発売

平成十年一月下旬予定

限定五百部(番号入)

山口県徳山市銀座二の二二
〒七四五-〇八四 〇二九五
FAX 〇八四 〇二九五
マツノ書店
▼分割払いに応じます。
▼分売は致しません。
▼書店には卸しません。

「奇兵隊日記なら持っている」あなたへの

特別ご案内



(29) 越後津川・会津高田間道路絵図

マツノ書店

内容見本・索引

あ

相島五郎	あいき	おかしろ	上	678	中	51	下	618
相島省吾	あいしま	ごろう	上	570	中	130	下	
相島省吾 (もと相本豊太)	あいしま	せいご	上	387	中		下	
会津幸市	あいづ	こういち	上	524	中		下	
会津公	あいづ	こう	上	331	中		下	
相場監二	あいば	かんじ	上	598	中	307	下	
会田春輔 (もと三好軍太郎)	あいだ	しゅんすけ	上	549	中		下	
上	556	574	588	597	603	612	616	619
43	50	52	56	57	58	60	61	62
137	141	143	144	151	152	155	156	162
448	452	453	474	475	549	174	173	174
183	187	189	197	198	252	271	311	313
133	42							

あ

栗飯原衛門兵衛	あいばら	えもんひょうえ	中	788
相本常吉	あいもと	つねきち	上	373
相本豊太 (のち相島省吾)	あいもと	とよた	上	387
青木	あおき		上	384
青木猛比古・猛彦	あおき	たけひこ	中	208
青木平右衛門	あおき	へいえもん	中	387
青木与三郎	あおき	よさぶろう	下	50
青地源右衛門	あおじ	げんえもん	下	266
青槌与七	あおひ	よひち	中	9
青柳彦五郎	あおやぎ	ひごろう	下	472
青山上総助・上総介	あおやま	かずさのすけ	上	35
青山善助	あおやま	ぜんすけ	上	35
青山辰三郎	あおやま	たつさぶろう	中	639
青山辰太郎	あおやま	たつたろう	中	639
中	391	401	403	405
683	691	737	738	783

六月廿九日

同廿九日 晴

一堀平三郎・林半七前田より帰陣
一宮口清吉御用ニ付、前田より帰陣
一今夜より陣屋内外一伍宛回番仕候事
一福原三蔵・白井小輔・飯田幸蔵前田より帰陣

極楽寺方

一山県初三郎・天野清三郎・田村甚之允・長安栄三郎帰陣之事

一馬屋原武熊一伍前田斥候之事

一天野清三郎一伍檀浦出勤事

一堀市二郎・田中直吉用事ニ付、長府罷越候事

一山県初三郎・堀平三郎用事有之、新地罷越候事

一堀市二郎・田中直吉昼後帰陣

一西ノ刻高杉晋作帰陣事

一高杉晋作御政務役蒙候事

七月一日

七月一日

宮口清吉

一山県初三郎一伍前田斥候之事

一前田上ノ台場築立成就ニ付、酒差出候事

一田ノ浦より昨日御沙汰之御受書差越候事

一飯田行蔵・白井小助前田行

一松尾初作・勝山鼎帰陣之事

一伊藤貞三帰陣之事

一田村育蔵京師より山口迄帰り本陣へ来候事

一久留米藩淵上郁太郎来ル

十五之伍 当直

九月廿日

九月廿日 快晴

杉山初之進

渡辺 辰蔵

馬島 甫仙

一赤根武人・片野十郎山口より帰陣之事、入江九一ハ直ニ山口へ滞在之事

一今井六郎当直ニ相当候処、病氣ニ付出勤不仕候事

一今朝五ツ時、各陣行軍して本陣へ相集り、此地之獵師を以て郷導と為、合図之螺を吹、

各一同小梅峠へ罷越候事、行程式里計

但、各陣式三人宛残居、留守番之事

一午後、赤根武人岩国事情探索、且小瀬川関門築立見合とシテ堀真五郎同道ニて罷越候事

一小田村信之進病氣全快ニ付、三田尻より帰陣之事

一黄昏、一同狩場より帰陣、狐一を得、一応本陣へ揃、篝を焼鯨声を揚げ螺を吹き、各陣

へ引取候事

一狩場之獲物致配分候ニ付

狩場之獲物各陣へ致分配候間、今日之御労を慰めん為との事ニ御座候、此段御承知可被

今回発行の定本とこれまでの刊本（日本史籍協会叢書・全4巻）を比較したものです。この頁は定本の上巻ですが、刊本（第1巻15頁）では[]の部分完全に脱落しており、●印は誤字になっています。

左の頁も上巻です。刊本（第1巻182頁）では[]の部分完全に脱落しています。

刊本には1行以上の脱落が150箇所以上あり、地名・人名の誤読は数え切れません。

「奇兵隊日記」索引について

東行記念館学芸員

一坂 太郎



いまを去る十二年前のこと。大学入学のために上京したての私は、神田の某古書店の棚に並んだ、『奇兵隊日記』全四冊を見つけた。『奇兵隊日記』は大正七年、日本史籍協会から出版されたのが最初だが、それは昭和四十二年に陸書房から出た復刻版だった。

欲しくて欲しくて、毎日、その古書店に通っては、中身をパラパラとめくった。隊士たちの日常が生々しく記録されていて、どこを読んでも新鮮で、感動的だった。

そんなことを一カ月近くくり返し、私はついに決意をかため、『奇兵隊日記』を棚から下ろして、レジに持って行った。二万五千円の値段がついていたが、店員が山口県出身の人で、千円値引きしてくれたのを覚えている。実はそのうちの二万円は、故郷の親が冷蔵庫を買いなさいと、仕送りしてくれたお金だった。以来、私の部屋には大学卒業まで、冷蔵庫というものがなかった。だが、この瞬間に私の将来が決まったのかもしれない。

『奇兵隊日記』と聞くと、私はそんな他愛もないことを思い出す。いまでも書架に並ぶ四冊本は、付箋や傍線が増えて少々たびれてはいるけれど、私が史学を学び始めたころの情熱の記念品だ。だから他のどの史料よりも愛着がある。こうして手に入れた『奇兵隊日記』ではあったが、正直言って実に使い難い史料であった。なにせ索引はもちろん、大ざっぱな目次すらも付いていないのである。たとえば「高杉晋作」のことを調べたいと思っても、一巻の一ページ目から見てゆかないと、どこに出てくるか分からない。これは楽しくもあったが、大変な作業だった。

東行記念館学芸員になってからは、『奇兵隊日記』を抜ける回数が増えた。隊士の遺族の訪問を受けて質問されると、私は『奇兵隊日記』から、ひとりの隊士の行動を追って回答するのが常になった。そのたびに、せめて人名索引だけでも付いていたら、どれ程便利だろうと切に感じた。自分で作ってみようかと考えたこともあるが、案の定挫折した。

その希望が僅か数年後に現実のものになるとは、思ってもみなかった。しかも数々の問題点が指摘されて来た日記本体が、八十年ぶりに新たに厳密な校訂を経て、「完全復刻版」として刊行されるのである。なんて素晴らしいことだろう！こんな幸せな時代に生まれたことを、私はまず感謝したい。

奇兵隊はその名前が知られている割には、隊士個々の事歴について、詳しい調査、研究がなされているとは言い難い。奇兵隊が近代日本の軍隊はもちろん、国家全体に及ぼした影響は、はかり知れないものがある。そのことは、隊から陸軍大将一人（山県有朋）と陸軍中将五人（鳥尾小弥太・三浦梧楼・三好重臣・三好六郎・滋野清彦）を出していることからも、うかがえるであろう。彼らが奇兵隊内でどんな働きをして、どのような地位に在ったのかを具体的に知るのも、意義深いことだろう。これまでは人名辞典に所収された略歴などで、「数々の戦功を立て……」とか「頭角をあらわし……」とか、漠然と片付けられていたことが、索引を使うことで、実に容易に調べることが出来るようになる。

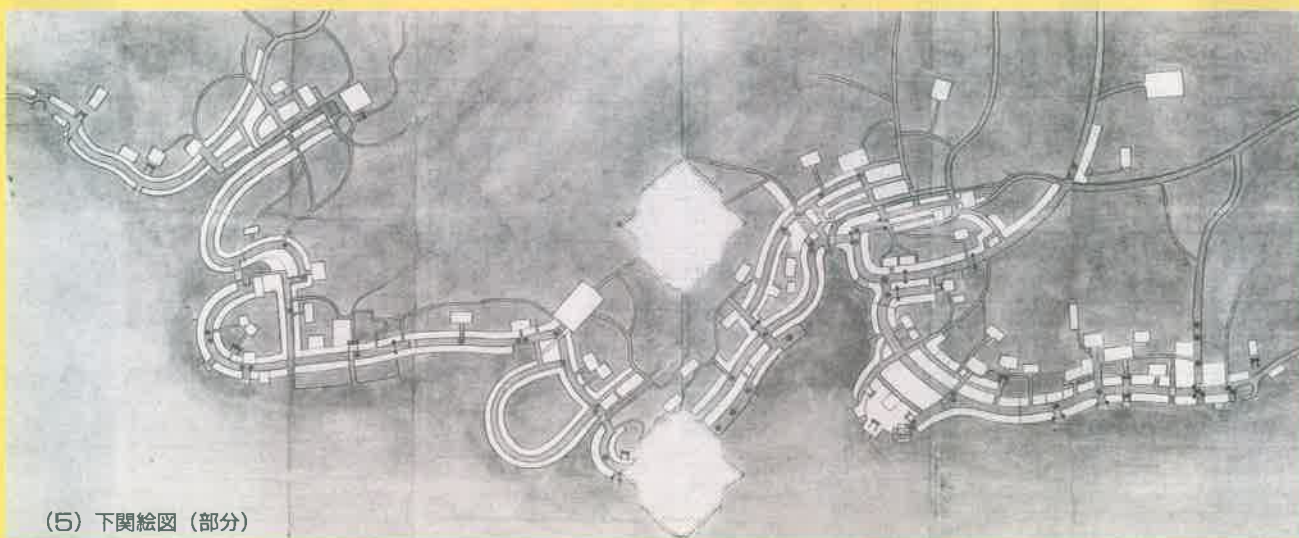
また、脱隊騒動をはじめとする、数々の事件で抹殺されていった、悲運の隊士たちの行動を具体的に辿ってみるのも、興味深そうだ。案外、これまで知られていなかった事件の側面が見えてくるかも知れない。

一冊の索引が、今後の維新史研究の大きな鍵を握っていることは間違いない。私も今後何十年か、死ぬまで座右の書として、離さないと思う。

本邦初公開 『奇兵隊日記付属絵図』



(22) 越後国長岡・板尾間道路絵図（部分）



(5) 下関絵図（部分）

■「奇兵隊日記」には、冊子体の記録以外に、付属史料として絵図四十九枚が含まれている。この絵図は今回初めて復刻されるものである。

■長州藩内では隊員は土地勘を持っており、地図が必要なのは藩外での戦いである。奇兵隊は越後長岡から会津若松での激戦が多かったため、その方面の地図が多い。

■絵図を対象地域によって分類すると、広い意味で長州藩に関係した図が五、戊辰北越・会津戦争に関係した図が四十四点である。

■絵図を内容から見ると、奇兵隊が作成したと判断される簡単な略図と、外部から入手したものとみられる精密な絵図とに分けられるが、その境界は定かではない。

■研究に際してこうした画像資料を利用することは、奇兵隊については未だまったくといってよいほど行われていない。本書によって、絵図をふまえた研究が進むことを期待したい。

■復刻に際して、次の操作をおこなった。
①すべての絵図をA3版に縮小した。
②色刷りの絵図も数枚あるが、重要性を考慮した結果、一枚だけをカラー印刷にし、あとはすべてモノクロで印刷した。

■絵図名の一部

長府藩勝山城周辺絵図 小倉藩領内里付近絵図 石見国絵図 下関絵図 薩英戦争鹿兒島湾図 越後国蒲原郡馬取村にて探索略図 越後国長岡・新発田間道路絵図 越後津川・会津若松間道路絵図 会津若松城下絵図